

# 完全性と力

## —重層的な力の概念史の試み—

田 中 智 志

〈概要〉 ギリシア的なテロスではなく、キリスト教の完全性概念に注目し、近代教育概念を支えてきた力概念について、一つの思想史の見通しを示したい。キリスト教においては、人間の自然本性は古くから否定的・固定的に意味づけられてきたが、およそ18世紀ころに、完全性概念の変容とともに、肯定的・可塑的に意味づけられるようになった。「人格形成」「人間形成」「道徳性形成」としての近代教育概念は、自分を完全化しようとする人間の内在的可能性が実体化されることで、存立可能になった。この可能性としての完全性概念は、ギリシア的なアレテーに類比される自律性という強さの力を指向している。しかし、初期キリスト教以来の完全性概念は、17世紀にいたるまで、強さの力よりも、アガペーに類比される互惠性という弱さの力を含意していた。その意味で、近代教育概念の成立契機となった可能性としての完全性概念は、弱さの力を看過した概念である。デューイが示唆しているように、人間の成長に必要なものが、自律性（強さの力）につながる可塑性（自己変容性）だけでなく、互惠性（弱さの力）につながる依存性（相互活動性）でもあるなら、近代教育概念は、人間の成長に不可欠な両輪の一つをもたないまま作られ、そのまま運用されてきた、といわなければならない。

## 1 近代教育の礎としての完全性概念

### 桎梏としての人間の自然本性

近代の教育概念の存立条件を問うことは、可能性としての完全性概念と等値される「人間の自然本性」(human nature / nature humaine / menschliche Natur)の社会的・言説的な存立条件を問うことである。18世紀に語られた人間の自然本性が、神の存在を認めつつも、人間の力で変えられる可塑的で肯定的な人間の本質を意味していたのに対し、17世紀までに語られた人間の自然本性は、人間の力では変えられない予定的で否定的な人間の本質を意味していたからである (Luhmann 2002: 170-1)。

キリスト教においては、『聖書』が語るところの「楽園追放」によって、すべての人間の自然本性は「原罪」(peccatum originale)を刻まれたと考えられ、その否定性は人間の力によって変えられるものではないと考えられてきた。ひとはもともと「神の似姿」(similitude Dei)であり、神と結びついていたが、「自分の欲望」を抱くことで、神から分出し、神との結びつきを喪ったと考えられ、その結びつきはひとの力だけでは回復不可能であると考えられてきた。たとえば、アウグスティヌス (Aurelius Augustinus 354-430)は、人間は原罪を後世に伝えつづける「悪のかたまり (massa peccati)」, いかえるなら、すべてを支配しようとする「傲慢な情欲」であり、自分で自分の「魂」を救済することはできない、人間の魂を救済できるのは唯一、神のみである、と述べている。

魂の救済は、キリスト教徒にとってもっとも重要な人生の課題であったが、これも、18世紀にいたるまでは、基本的に神の御業であり、人智の及ばない営みである、と考えられていた。すなわち、人間の魂は、神によってあらかじめ、救われるものと救われないものとに分けられている、と考えられていた。これが、いわゆる「予定」(predestinatio [n])説

である。

## 人間の自然本性を変えられない教育

こうした背景のもと、17世紀にいたるまでのキリスト教的思想においては、いかなる教育も、それが人間の営みであるかぎり、人間の自然本性を変える力をもたない、と考えられてきた。

たとえば、カトリックのモンテーニュ (de Montaigne, Michel Eyquem 1533 - 1592) は、1580年ころに次のように述べている。「自然本性的な傾向性は、教育 (institution) によって助長されたり、強化されたりするが、それが改変されたり克服されたりすることはほとんどない。今日でも、何千という [人間の] 自然本性が、それとは反対の方向をめざす規律化の手をすり抜けて、ある場合は徳へ、他の場合は悪徳へと向かっている」。なるほど、「現在、新しい考え方にしたがって、世間の道徳を矯正しようと試みた人びとも、外見上の悪徳だけは改革しえたが、本質的な悪徳は、増加させないまでも、そのままにしている」と (Montaigne 1973 [1595] = 1965 - 7, Vol. 5 : 46, 47)。

また、カルヴァン派の哲学者バイル (Bayle, Pierre 1647 - 1706) は、1682年に次のように述べている。「教育は、有益な結果をもたらすこともありうるが、それだけでなく、宗教的狂信や宗教的迫害の場合のように、人びとを教育者や共同体の熱情に従わせるという、悪い結果をもたらすこともありうる。そして、いずれの場合においても、[所詮、人間の営みでしかない] 教育は、人間の魂のなかにある墮落の芽を摘むことができないのである」と (Bayle 1984 [1682] : Sct. 238)。

## 必然性、可能性、完全性

こうした教育の限界は、神の「必然性」と人の「可能性」という厳格な区別と一体であった。人の可能性——「……かもしれない」という可能性 (不確実性) ではなく、「……ができる」とういみでの可能性 (能力)

——が語られる場合、それは、神の定めである必然性を変える能力を意味していなかった。人の可能性は、神の必然性の枠内にとどまるものだった。

こうした神の必然性と人の可能性との区別は、キリスト教における神と人との厳格な区別に対応していた。それは、神を人にとっての「絶対他者」すなわちけっして人間と同化しえない存在と位置づけることである。ちなみに、神の本質は「聖性」(Holiness)であるが、ヘブライ語で「聖性」にあたる言葉は「輝き突出する」「分離したもの」を意味するコーデシである (Greathouse 1979=1980:27-8)。

しかし、18世紀になると、のちほどふれるように、可能性としての完全性概念が拡大し、人間の自然本性の可塑性・肯定性が広く信じられるようになっていった。この時代に語られた「完全性」(perfection / Vollkommenheit)、「完全主義」(perfectionism)、「完成可能性」(perfectability / perfectibility)、「形成可能性(教育可能性)」(Bildsamkeit)といった言葉は、人間が完全化する内在的可能性(内包的能力)を意味し、その内在的可能性が人間の自然本性と重ねられるようになった。

アメリカ、イギリスの場合、perfection, perfectabilityという言葉は、リベラル・プロテスタンティズム(とりわけユニテリアニズム、エヴァンジェリカリズム)によって喧伝され、「道徳哲学」「教育思想」の主要な概念として大学に定着していった。フランスの場合、perfection, perfectibilitéという言葉が、18世紀後半に登場した「道徳科学」「教育思想」によって提唱され、定着していった。ドイツの場合、Vollkommenheit, Bildsamkeitという言葉が、18世紀末期から19世紀初期に登場した「人間学」そして「教育学」によって提唱され、定着していった。

## 2 依存性と可塑性

### 完全性指向の近代教育論

よく知られているように、こうした近代教育概念の思想的出自については、すでにデューイ (Dewey, John 1859 - 1952) が『デモクラシーと教育』において、批判的に跡づけている。

デューイにとって、フレーベル、ヘーゲルの教育論は、完全性指向の近代教育論の典型である。彼らの教育論の大前提が、人間のなかにある「完全性の種子」だからである。彼らにとって完全性は、たんなる理想ではなく「今ここで人に作用している」ものであるが、外から充分に働きかけられなければ「内包的 (implicitly)・潜在的 (potentially) なまま」である。重要なことは、この内包的・潜在的な完全性を明確化し外在化することである。それが完全性の「漸進的実現」であり、その営みが成長・発達であり、その成長・発達の促進が教育である (Dewey 1996, de, mw. 9 : 61 - 2)。

デューイは、こうした完全性指向の近代教育論が成長・発達を重視しているようにみえるが、実際のところ、成長・発達を「完全性」という超越的目的によって枠づけ、子どもの現在を未来の手段に貶めている、と批判している。

「……この教育観は、発達を継続的な成長の過程とは考えず、伏在する諸能力が確かな目的に向かって発現していくことである、と考えている。その目的は「完遂性」(completion), 「完全性」(perfection)と見なされている。「このような考え方は、……動態的な生の考え方をまねて、発達、過程、進歩を重視している。しかしそこでは、これらの活動はすべて過渡的なものにすぎないと考えられている。す

なわち、それらの活動それ自体の意味を喪っている。それらの活動はすべて、今現在進行しているものから遠く離れた確かな目的に向かう運動としてののみ、意味をもっている。[この場合] 成長は、完全な存在 (a complete being) へ向かう運動にほかならず、究極の理想は、その不動である。抽象的で不確実な未来は、制御されている。今現在の能力や機会を軽視させるような意味をもつものによって」(Dewey 1996, de, mw. 9 : 61)。

デューイによると、フレーベルは、「成長しつつあることが成長であり、発達しつつあることが発達であるということが理解できなかった」。フレーベルのかかげる「完全に発達した状態という遠い目的は、哲学の専門用語を用いれば、超越的である。それは、直接的な経験や知覚から離れた何かであり、経験に即して考えるかぎり、空虚なものである。それは、理性的に理解し論述できるものというよりも、むしろあいまいな感情的欲求を示している」と (Dewey 1996, de, mw. 9 : 61 - 2)。

また、ヘーゲルは、「抽象的に個人を強調し、発達の完全かつ包括的な目的という概念のなかに具体的個人を飲み込んでしまった」。それは、教育を「成長ではなく、外からの命令」と貶めることである (Dewey 1996, de, mw. 9 : 62)。ヘーゲルにとっての完全性の達成は、社会全体の完全性の達成を必要とする営みであり、それは社会全体を組織と見なすかぎり、個々人の意思決定を無視し、個々人を社会のなかの不平等な地位にむりやりを位置づけることである、と。

デューイによるこうした完全性論批判は、デューイ自身が意識しているかどうかかわからないが、テクネー、パイディアを嬉々として語りつづけるギリシア的思考への批判であり、キリスト教的完全性論すべてに対する批判ではないのではないだろうか。

## 未成熟の力

デューイにとって、本来の教育とは、子どもの成長（への援助）であり、成長とは「行動の累積的な動態であり、のちに現れる結果をめざすもの」であった。そして、デューイは、この「成長の第一の条件は人が未成熟であること」である、と強調している（Dewey 1996, de, mw. 9 : 46）。

デューイにとって、「未成熟」であることは、否定的状態ではなく、肯定的状態だったからである。いいかえるなら、未成熟であることは、「たんなる欠如」を意味しているのではなく「積極的な力」（force）を意味していたからである。デューイは「ここで未成熟は成長の可能性（the possibility of growth）を意味しているというとき、それは、のちに現れる力能（powers）が欠如していることを意味しているのではなく、現在、積極的に活動している力（forces）——発達する能力（the ability to develop）——が存在していることを意味している」と述べている（Dewey 1996, de, mw. 9 : 46）。

もちろん、こうしたデューイの教育概念は、広い意味で近代教育概念のなかに位置づけられる。デューイが人間の自然本性を前提にして、教育を論じているからである。デューイは、たとえば、1938年に「人間の自然本性は変わるのか」と問い、「人間の自然本性はまさに変わるというのが適切な答えである」と述べている。「もしも人間の自然本性が変えられないのなら、教育、また教育にかかわるすべての私たちの努力は水泡に帰すほかない。というのも、教育の意味するところは、もともとの人間の自然本性を、それとはかけ離れた新しい様式の思考・感覚・欲望・信念に作りかえることだからである」と（Dewey 1996, de, mw. 9 : 287, 293）。

## 依存性と可塑性

ともあれ、ここで着目したいことは、デューイが、「成長の可能性」

を生み出す「活動の力」を、「依存性」(dependence)と「可塑性」(plasticity)の二つに分けている、ということである。「依存性」とは、他者に保護されなければならないことであると同時に、「周囲の人びとの態度・行為に共鳴し感応すること」であり、「可塑性」とは、「しなやかな融通性」であると同時に、「経験から学ぶ能力(ability)すなわちある経験からそののちの状況の諸困難に対処するうえで有益なものを会得し保全する力(power)である」(Dewey 1996, de, mw. 9: 48, 49)。

成長において可塑性が重要であることは、容易に理解できるだろう。教師の指導をかたくなに拒み、自分の考え方・やり方にこだわるなら、教育は不可能だからである。また、経験から何も学ばず、新しい問題が生じても、それに対処する方法を考えられないのなら、成長を望むことはできないからである。可塑性は、個人の力能、自律性を形成する大前提である。

これに対し、成長における依存性の重要性は理解しにくいだろう。すくなくとも、個人の自律性だけを念頭において理解しようとするかぎり、依存性は否定されるべき状態である。依存性の重要性は、人間の互惠性・歓待性という関係性を念頭におくとき、ようやく理解可能なものとなる。生きることは、互惠的・歓待的に生きることでもあると考えるとき、他者に依存することは、他者を愛し、信じ、他者に贈り、他者から与ることである、と意味づけられるからである。

## 社会性と個人性

デューイは、依存性と可塑性の関係について明示的に語っていないが、この二つは重層的な関係にあると考えられる。暗示的な議論は、デューイの社会性と個人性の重層性論である。ごく大まかにいえば、依存性は社会性に対応し、可塑性は個人性に対応している。デューイは、「一方的で自己中心的な個人主義が、現代のアメリカ人の生活実践に刻み込まれている。……現代アメリカの個人主義は省察を欠いた野蛮なも

のである。そして、現代のアメリカ人が理想とする個人は「個人そのもの」すなわち社会性を踏まえ、それに支えられた個人ではなく、孤立し自分のことしか考えられない個人である」といい (Dewey 1996, lw. 2 : 20), こうした個人主義に由来し、それに培養された「自己利益への動機は……反社会的」であり、「道徳性に矛盾するもの」であるという (Dewey 1996, lw. 5 : 481)。

デューイにとって、人びとが「他者への依存」という社会性を喪い、個人主義的な個人性 (自律性) に惑溺することは、きわめて危険なことだった。

「社会的観点から見ると、[他者への] 依存は、弱さではなく、むしろ力を意味し、その依存は、相互依存 (interdependence) をふくんでいる。個人の独立性が増加することは、個人の社会的能力 (social capacity) が減少する危険性をつねにはらんでいる。個人が独立的・自立的になればなるほど、個人はますます自己満足的になるだろう。つまり、個人は独善的になり、他者に対し冷淡になるだろう。その結果、人はしばしば自分と他者との関係について非常に鈍感になって、自分ひとりで生活し行動することが実際にできるにちがないという幻想にとりつかれるだろう。それは一種の無名性の狂気であり、それは治療可能ではあるが、この世界を現に苦しめている多くの災厄の原因である」と (Dewey 1996, de, mw. 9 : 49)。

人が「人間になること」すなわち個人性を確立することは、同時に協同体において「機能的」に活動することである。デューイは、1927年に『公共性とその問題』において、次のように述べている。「人間になることを学ぶことは、相互のコミュニケーションをつうじて、協同体の大切な構成員としての個人性を発達させることである。この[協同体に基礎づけられた]個人性を体現している人は、[協同体を支えている]信

念・欲望・方法を理解し評価している人であり、生体的な力 (organic power) を人間的な資源・価値に転回させることができる人である。しかも、この転回はけっして終わらないのである」と (Dewey 1996, pp. 1w. 2 : 332)。デューイは、端的に「相互扶助 (Mutual aid) は、成功の礎である」とも述べている (Dewey 1996, e, 1w. 7 : 44)。

デューイの社会性概念は、機能性 (有用性) への傾きをもっているが、それに還元することはできない。デューイにとって、社会性の本態は「愛他性」(altruism) だからである。デューイは、『心理学』において、次のように述べている。「人に対する対照的な二つの心情があるといわれている。一つは自分のための心情、つまり自己中心のないし個人的な心情といえるだろう。もう一つは他者のための心情、つまり愛他的ないし社会的な心情といえるだろう」と (Dewey 1996, P, EW. 2 : 281)。

### 3 弱さの力と強さの力

#### キリスト教における愛と完全性

デューイが暗示した依存性と可塑性の重層性は、おそらく、近代以前の西欧キリスト教思想における愛と完全性との重なりあい、そしてこの愛としての完全性と、自己制御としての自律性との、重層性に類比されるのではないだろうか。キリスト教のなかで語られるもっとも原初的な依存性は、神への愛、神からの愛であり、それに支えられて実現されるものが、人間の完全性 (人間の「義」) に向かう生であり、そうした生にこそ、真の自律性が生まれるからである。

たとえば、第二コリント書に、次のように書かれている。「すると、イエスは私にいわれた。『私 [=イエス] の恵みは、あなたにとって充分である。なぜなら、力は、弱さにおいて完全になるからである』。……私 [=パウロ] が弱いとき、そのときにこそ、私は力ある者である」と

(Ⅱコリント 12. 8-10)。自分一人の力で生きていこうとせず、神を愛し神に愛されることは、世俗的な弱さを生きることであるが、同時にそれを超える真の強さを生きること、すなわち完全に生きることであると。

アウグスティヌスも、人間のなかには「愛」への意志があり、その愛への意志が、完全に実践され、神からの愛と一体化するときに、ひとは、神との結びつきを回復し、完全性に到達しうる、と考えていた。アウグスティヌスにおいては、愛は、ひととひとの、神とひとの、互惠的・歎待的な関係性を意味し、完全性は、理念化されたひとの存在様態を意味している。

トマス・アクィナス (Thomas Aquinas 1225-74) も、『神学大全』において、アウグスティヌスとほぼ同じような、愛と完全性との重なりあいを語っている。トマスは、のちのルターとちがいで、「神の恩寵 [という神からの愛] は、人間の自然本性を人間が捨てるのではなく、むしろそれを完遂させ、人間を完全化する」と述べている (稲垣 1996: 51から引用、ただし訳文変更)。トマスにとって、「人間の自然本性」とは「理性」であり、「理性」とは「神性」である。いわば、同質的である神の愛と人間の自然本性が共鳴するときに、ひとは、おのれの限界を超えて、おのれを高めていく。トマスは、アウグスティヌスと似て、人間の自然本性に神の似姿を見だし、完全化への契機を見いだしている。

ともあれ、アウグスティヌスの言説にせよ、トマスの言説にせよ、意味のうえで愛と重なりあう完全性を語る言説においては、ひとの存在は、固有的・理性的であり、かつ相互扶助・純粹贈与という営みそのものであり、その意味で、ひとは、自然の存在から区別される歴史的な存在・状況内存在である。いいかえるなら、人間の生きる状況は、つねに他のひととの関係性によって、それも代替不可能な・偶然固有的な関係性によって規定されている (Bultmann 1980=1986: 262)。

このようなキリスト教的な存在概念は、ギリシア哲学的な存在概念と

根本的に異質である。プラトマンが論じているように、ギリシア哲学では、存在は、基本的にテクネーの行為、つくることとの類比によって、理解されているからである。存在は、テロスに向かって造形されるべき作品として、理解されているからであり、力は、つねにアレテー (技量) として意味づけられているからである (Bultmann 1980=1986:262)。このギリシア的なテロスとキリスト教的な完全性は、後世において分ちがたく混同されてきたが、明確に区別されるべきである。

### 強さの力と弱さの力

時代を大きくくだるが、18世紀においても、愛と重なりあう完全性は、説かれている。たとえば、メソジスト派の始祖であるウェズリー (Wesley, John 1703-1791) においては、愛と完全性は一体であり、それに支えられて生じるものが自律性である。たとえば、1758年に、彼は「[完全性という] 言葉は、さまざまな意味をもっているが、ここでいうその意味は完全な愛である。それは罪をともしない愛である。魂のすべてがこの愛で満たされていることである」と述べている (Wesley 1993-[sw]:I-9)。また、1767年に、彼は『キリスト者の完全性の簡明な説明』においても、「私が完全性で意味するものは神への謙虚な、柔和な、辛抱強い愛であり、そうすることで、私たちは隣人に対し自分の気質、言葉、行為を抑制することができる」と述べている (Wesley 1995 [1831], Vol. 11:446)。

しかし、全体の趨勢を見るなら、18世紀以降、愛 (アガペー) は、しだいに完全性から切り離され、個人の有用性が、完全性に結びつけられるようになった。18世紀以降に語られる education, education, Bildung の言説は、その典型である。フランクリンであれ、ジェファソンであれ、ルソーであれ、コンドルセであれ、また、カントであれ、ヘーゲルであれ、18世紀に教育を語った人びとにとって、完全性は、もはや愛に支えられたものでもなければ、愛と一体のものではなかった、といえる

だろう。「愛」(love/aimer/Liebe)という言葉が意味するものも、古代ギリシアのエロースに類比されるものによって変わった。エロースは、まだもっていないものを欲する感情であり、低みから高みへいたろうとする努力である。そして何よりも、「エロースは、元来、汝に対する態度ではないという事実によって、アガペーから区別される」(Bultmann 1980 = 1986 : 268 訳文変更)。

そして、19世紀以降の教育論、いわゆる近代教育論は、よく知られているように、完全性の達成を語りながら愛(アガペー)としての完全性を達成することのかわりに、いいかえるなら、パウロのいうオイコドメー(原義は「建築」「形成」「啓発」であるが、パウロの場合、「愛のなかでお互いに人を形成すること」を意味する)\*のかわりに、個人の能力形成、優秀性の形成(パイディア)を語ってきた。完全性は、そのキリスト教的なテロスを喪失し、換骨奪胎され、かわりに、自律性・有用性などをめざす、いわば、強さの力が声高に語られるようになった。デューイが示唆しているように、人間の成長に必要なものが、自律性・有用性(強さの力)につながる可塑性(自己変容性)だけでなく、互惠性・歓待性(弱さの力)につながる依存性(相互活動性)でもあるなら、近代教育概念は、人間の成長に不可欠な両輪の一つすなわち弱さの力をもたないまま作られ、そのまま運用されてきた、といわなければならないだろう。たとえば、弱さの力という土台をつくらないまま、強さの力という建物をつくり、その種の土台なき建築方法を踏襲してきた、といえるだろう。

\* たとえば、パウロの「ローマの信徒への手紙」では、「だから、私たちは平和を追い求めようではないか。そして、お互いに形成することを」(14.19)と記されている。ギリシア語のオイコドメーは、ラテン語のウルガタ聖書では *aedificationis* と訳されている。なお、このラテン語は、現代のフランス語の *edification* (建築・構築・啓発)に引き継がれている。

私が考えている完全性の概念史において、基本的に彫塑されるのは、強さの力と弱さの力の関係である。さしあたりそれは、次の三つにまとめることができる。

## 理念にすがりつかない思考

第一に、一般に力といえば、権力・財力・体力・能力のような、また自律性・有用性のような、人間・事物を支配し操作する強さの力が重視されてきたが、すくなくともキリスト教の伝統のなかでは、互惠性、愛他性のような、存在者と結びあい、支えあう弱さの力も語り継がれてきた。概略的にいえば、強さの力は、アレテー、パイディアを語るギリシア的な力の概念にそうものであり、弱さの力は、アガペー（フィラデルフィア）、オイコドメーを語るキリスト教的な力の概念にそうものである。たとえば、ブルトマンは「[ギリシア的精神においては] 他者は私の「隣人」ではなく、私と同じように理念の要求の下におかれている。私が聴き従うのは、他者の求めではなく、理念の求めであり、私は、理念によって規定されたテロスへ向かって他者を教育しなければならない。私とあなたは、ここでは原則として区別されていない」と述べている（Bultmann 1980=1986:263）。

弱さの力は、基本的に何らかの理念にすがりつかない思考である。この思考は、倫理感覚に彩られた思考である。たとえば、パスカルが、「人間はひとくきの葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。しかし、それは考える葦である」（L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature ; mais c'est un roseau pensant.）というとき、パスカルは、人間の弱さにこそ人間の力を見いだしている。その力は、弱い人間が束になり、知恵を競い、自然や社会を思うままに操作する技術を創りだす力ではない。その力は、人間が死にゆく存在であること、遺し遺される存在者であると知ること、ひととしてなすべきことを知る力である。それは、パスカルの言葉でいえば「モラル」であるが、ここでは倫理感覚に彩られた

思考であると、述べておきたい (Pascal 1976=1973 : § 347 [1671 : 174])。

### かけがえのないものの複合

第二に、強さの力は単数的であるが、弱さの力は複合的である。いいかえるなら、強さの力は、何かを創りだす作為の個人に集約されるが、弱さの力は、生きる存在の協同に充溢する。確認しておくなら、ここでいう「単数」は数えられるものの「一つ」であり、「唯一」(unum)ではない。キリスト教の言説においては、unum deum (唯一の神)、unum dominum (唯一の主)といわれるように、「唯一」は、「真」(verum)、「善」(bonum)とならんで、神的な存在の特徴として語られてきたが、その場合の「唯一」は単独性を意味し、一つ二つと数えられず、これこれであると意味づけられない存在である。逆に、「一つ」は、逆に数量性・意味性を意味し、数えられ、意味づけられるモノである。弱さの力が複合的であるのは、それが本来的に複数的であり、「唯一」である人が、他の「唯一」である人とともに作りだす、より大きな「唯一」だからである。

いいかえるなら、弱さの力は、傲岸な自己表現から無縁の思考である。自己を表現し強調することは、自分自身が貧困であることが示す一つの徴候である。自分がひとから認められていないという思い、ひとから高く評価されていないという思いが、暗い欠乏感を生みだし、その欠乏感が、「このわたし」を前面に押しだす力を生みだす。「このわたし」の先導する言説に符合する他者の意見については、これを取り入れるが、符合しない意見については、これを遣り過ぐす。こうした傲岸な自己表現は、極端な場合、独裁者のような、ゆがんだ強さの力を生みだす。そこには、「唯一」なる他者への愛が欠けている。それは「唯一」なる自分への愛が欠けているからである。「自分しか愛せない」という表現は端的に誤りである。他者を愛する者ののみが、自分を愛せるからである。

## 弱さの力が生みだす強度

第三に、強さの力は、弱さの力に支えられている。この二つの力は、対立的に分離しているのではなく、重層的に関係しあっている。逆に、強さの力と弱さの力の重層性を看過するときに、力は強さの力に還元され、倫理的なものを喪失し、実体化されてゆく。「生きる力」「選ぶ力」「力を試す」「力をつける」などの、教育界における「力」の用例が暗示している力は、弱さの力から分離された強さの力であり、実体化された力であり、しばしばその内容は、倫理的なものから疎外されている。逆に、強さの力が弱さの力に支えられるとき、強さの力は、愛（アガペー）を充填された英雄的な営みとなる。それは、成果の多寡や成果の確率など、歯牙にもかけない夢中・忘我な倫理的な営み、ドゥルーズ、デリダが用いる言葉を用いるなら、「強度」(intensité)に満ちた営みとなるだろう。

この強度に満ちた営みは、政治活動に気概を与えるだけでなく、教育活動にも気概を与えるだろう。「教える」という営みが、強度に満ちた営みであるかぎり、それは、学ぶ相手から受け取りを拒絶される可能性があるかどうか、と心配しないし、教えていることが役に立つかどうかといった、有用性の多寡も気にしない。強度に満ちた営みであるかぎりにおいて、教えるという営みは、いっさいの見返りを考えないどころか、教えるという営みそのものを忘れ去った純粋な贈与となる。

## 4 重層的な力の概念史へ

むろん、ここで述べてきたことは、完全性概念の歴史をめぐる一つの解釈案にすぎない。それは、これからその妥当性を吟味されるべきものである。その吟味作業は、アウグスティヌス以来の、とりわけルネサンス期(15・16世紀)から古典主義期(17・18世紀)におけるヨーロッパの思

想史において、完全性概念がどのように意味づけられてきたのか、その概念の変遷を描くことにひとしい。もしも、そうした完全性概念の変遷史が、ここで示してきた仮説から大きくずれなければ、その変遷史は、現在の力概念を相対化できる重層的な力の概念史となるだろう。その力の概念史は、端的に言えば、自律性・有用性をめざすヘレニズム的な強さの力が、互惠性・歓待性などに含まれるパウロ的な弱さの力から分離されることで、脱倫理化し実体化する、という歴史である。

機能的分化を本態とする近現代社会においては、人は一つの機能、一つの道具、一つの能力として位置づけられている。人は、政治システム、経済システム、教育システムなどの、何らかの機能システムの構成要素として位置づけられ、そのシステムの機能を充足することを第一義的に求められている。そのような機能性指向は、強さの力が弱さの力から分離され、脱倫理化することである。いいかえるなら、強さの力が、事物・人間を操作する能力、問題・課題を解決する能力に還元される傾向にあり、その能力が、倫理的な方向を有しているかどうか、その内実がほとんど問われないことである。端的に言えば、現代社会においては、力は存在から分離され、機能に還元されている。

力の概念史を描くことにどれほどの意義があるのか、と問われるかもしれない。なるほど、重層的な力の概念史によって、この趨勢的事実を歴史的に知ったとしても、その事実を変える強さの力にはならないのかもしれない。いわば、事実を知れば知るほど深まるディレンマのなかを、なんとか生きることしかできないかもしれない。しかし、これまでも多くの人びとが、現代社会のディレンマに類比されるディレンマを生きてきたという事実が示唆されるなら、私たちはすくなく鼓舞され、ディレンマを生き抜こうという意志を喚起されるだろう。その意味では、強さの力／弱さの力という重層的な力の概念史は、「勇気をもて」などといわずに、人に勇気を与えることになるだろう。

〈文献〉

- 稲垣良典 1996 『トマス・アクィナス』勁草書房。
- Bayle, Pierre 1984 (1682) *Pensées diverses sur la comète*, 2 vols. Paris : Nizet. = 1978/1989 野沢協訳「彗星雑考 [正]」「彗星雑考 [続]」『ピエル・ペール著作集』(第1 / 6巻) 法政大学出版局。
- Braun, Walter 1996 *Vollkommenheit und Erziehung: Geschichte und Gegenwart*. Weinheim : Deutscher Studienverlag.
- Bultmann, Rudolf Karl 1961 “Theologie des Neuen Testaments, Zweiter Teil,” *Rudolf Karl Bultmann Gesammelte Werke, Bd. 4*. Tübingen : J. C. B. Mohr. = 1966 川端純四郎訳「新約聖書神学Ⅱ」『ブルトマン著作集』第4巻 新教出版社。
- Bultmann, Rudolf Karl 1980 “Glauben und Verstehen,” *Rudolf Karl Bultmann Gesammelte Werke, Bd. 11*. Tübingen : J. C. B. Mohr. = 1966 土屋博訳「神学論集Ⅰ」『ブルトマン著作集』第11巻 新教出版社。
- Dewey, John 1996 *The Collected Works of John Dewey, 1882–1953: The Electronic Edition*, edited by Larry A. Hickman. Charlottesville, Virginia : IntelLex Corporation.
- de* = *Democracy and Education* (1916 MW. 9)
- rp* = *Reconstruction in Philosophy* (1920 MW. 12)
- hnc* = *Human Nature and Conduct* (1922 MW. 14)
- en* = *Experience and Nature* (1925 LW. 1)
- pp* = *The Public and Its Problems* (1927 LW. 2)
- qc* = *The Quest for Certainty* (1929 LW. 4)
- ion* = *Individualism, Old and New* (1929 LW. 5)
- e* = *Ethics* (1932 LW. 7)
- Diffey, Norman R. 1997 “The Uses of Empiricism: Ernst Christian Trapp, and the Tribulations of an Educational Reformer in Eighteenth–Century Germany,” *Lumen* (Canadian Society for Eighteenth–Century Studies) 16 : 147–161.
- Gilead, Tal 2005 “Reconsidering the Roots of Current Perceptions: Saint Pierre, Helvetius and Rousseau on Education and the Individual,” *History of Education*, 34 (4) : 427–439.
- Greathouse, William M. 1979 *From the Apostles to Wesley*. Kansas City, MO : Beacon Hill Press of Kansas City. = 大江信ほか訳『ウェスリー神学の源流』福音文書刊行会。
- Luhmann, Niklas 2002 *Das Erziehungssystem der Gesellschaft*. Frankfurt am Main : Suhrkamp Verlag.
- Mather, Increase 1962 (1692) *The Autobiography of Increase Mather*. Worcester : American Antiquarian Society.
- Menck, Peter 2001 “The Formation of Conscience: A Lost Topic of Didaktik,” *Journal of Curriculum Studies* 33 (3) : 261–275.
- Montaigne, Michel de 1973 (1595) *Les Essais*, ed., Pierre Michel. Paris : Editions Gallimard. = 1965–7 原二郎訳『エッセー』全6巻 岩波書店。

- Pascal, Blaise 1671 *Les Pensées, dans l' édition de 1671*. [[http://sami.is.free.fr/Oeuvres/pascal\\_pensees.html](http://sami.is.free.fr/Oeuvres/pascal_pensees.html)]
- Pascal, Blaise 1976 *Pensées* ; ed., Léon Brunschvicg. Paris : Garnier-Flammarion. = 1973 前田陽一／由木康訳『パンセ』中央公論社。
- Wesley, John 1993- [sw] “The Scripture Way of Salvation,” *The Sermons of John Wesley 1872 Edition*, Wesley Center Online : The Wesley Center for Applied Theology [[http://wesley.nnu.edu/john\\_wesley](http://wesley.nnu.edu/john_wesley)].
- Wesley, John 1995 (1831) *The Works of John Wesley On Compact Disc*. (The complete text of the 14 volume collection, edited by Thomas Jackson in 1831, including the King James Version of the Bible). Franklin, TN : Providence Publishing.